資料２－３

琉球大学理学部海洋自然科学科　伊澤雅子教授　ヒアリング

実施日：2015 年 2 月 10 日
実施場所：琉球大学理学部
出席者：伊澤教授、阪口野生生物課長・知識自然保護官（環境省）、宮川（自然研）

以下、（　）内は事務局で補足的に追記した部分。

１．科学委員会ワーキンググループ（WG）の結果の報告

- （アマミノクロウサギの生息地創出のために何か環境に人為的に手を加えてはという意見があるが、）アマミノクロウサギは他のウサギとは繁殖力や子育ての様式が異なるので、極端に増えすぎることはないかもしれないが、ウサギのような草食動物（の利用場所の保全や再生）に手を出すと、かえって増えすぎてしまう可能性もある。自然（の遷移）に任せるのが適切かと考えられる。
- 奄美大島以外ではノネコの捕獲・収容・順化・譲渡の体制ができているが、大きな枠組みとしてはそれも限界だろう。（処分も含めた）ノネコ対策については（個々の地域の動向も踏まえ）、環境省が（推薦地域）全体の問題として、どのように舵取りしていくかが重要と思う。
- ノネコ問題の他に、交通事故問題はどうなのか？問題となっていないのか、ノネコ問題の陰に隠れてしまったのか。現在は落ち着いていても、油断すると、世界遺産登録によって観光客等が増え、自動車も増える事が予想される。そのために道路をよくする（舗装する、直線化する、拡幅する等）といった動きも生じ、野生生物の交通事故も増える方向へと進むことが懸念される。奄美大島では林道に自動車が入り、金作原原生林は観光バスも入っている。土地所有との関係もあるが、林道の入り口に鍵をかけて、一般の自動車を入らせない場所を作る必要もあるのではないか。例えば、西表島では国有林で、大富林道や白浜林道は入口に鍵をかけてあり、徒歩では入ることができるが自動車は通行できない。可能であれば、世界遺産のコアの部分は林道に鍵をかけるなど対策をしなければ、交通事故や踏み荒らしも増えるだろう。
- エコツアーが盛んになるにつれて、ガイドの教育は最優先課題の一つだ。西表島のケースしか知らないが、エコツアーガイドが却って自然によくない行動をとっている場合も見受けられる。ガイドは本来、観光客の行動を見守り適切な行動へ誘導する立場だが、そこができていない。海外の国立公園等ではそれができている所が多い。また、観光客へ誤った情報を伝えている場合もある。世界遺産登録で観光客も増え、海外からも人が来るのであれば、推薦 4 地域のガイドの養成はきちんと行う必要があるだろう。また、外国人対応として英語での注意喚起やガイドも必要となる。
- 国立公園の仕組みとして、（観光客の管理上で）何ができるか。例えば、台湾のある国

立公園では、1 日の入園者数は最大 400 人で、インターネットでの事前予約制で、入園時レクチャーやガイド付き等が行われている。ある程度の制限、教育、監視をしないと影響は大きくなるのではないか。また、世界が相手だと、英語、中国語への対応も必要だろう。ガイド育成をしなければ、ガイドの質に大きな差がある。また、野生生物への影響を考えると、観光客等が容易に立ち入ってはいけない場所も作る必要もあるのではないか。

- 先行して登録された世界遺産地域、小笠原諸島や屋久島、知床、白神山地の課題や成功点などは整理されていないか。奄美・琉球は後発なので、先行した遺産地域の課題や成功点等を整理して、保全管理上とり入れるべき点や警戒すべき点に反映させるとよいだろう。各遺産地域の関係者に科学委員会等へ招聘して話題提供して欲しい。そういうシンポジウムやワークショップがあれば、聞きたいことも聞ける。

２．推薦書ドラフト案について

- 今年度、IUCN レッドリストのネコ科の見直しにあたっては、ベンガルヤマネコの評価でもめにもめた。（IUCN レッドリストは種レベルの評価が基本だが）イリオモテヤマネコは亜種でも特別扱い的に評価され掲載されている。他のベンガルヤマネコ亜種が、地域によってはとても多い、ツシマヤマネコや台湾のヤマネコは非常に少ない等で、絶対に掲載すべきという立場、まだまだ沢山いるという立場が対立し、今回は（地域の亜種レベルの評価は）見送りとなった。「ここにこれだけしかいない」とアピールする際に、（IUCN の評価に対しては、）固有性を強調すべきだろう。イリオモテヤマネコが亜種で IUCN レッドリストに掲載されていることは画期的である。
- 地史と生物地理の関係は、最近は新しい知見に基づく考え方も提示されており、従来のストーリーの大枠は変わらないが、島や大陸との分離時期や繋がり方等の細部は色々な点で考え方が変わるだろう。色々な文献を読んだり、人の話を聞いていると「これが」というものには未だ辿りついていないようだ。ただ、奄美・琉球は、（地史と生物の隔離・種分化による生物地理について）そういう議論や研究ができ、検証できることが興味深い場所であるといった書き方が推薦書でできるとよいのではないか。
- 推薦書ドラフトの各分類群の概要（種数等）について、在来種だけを対象とするか、外来種も含めて記述するか。哺乳類相の概要をみたところ、その点が判りにくかった。種数を整理した表で、在来・外来をはっきり分かるようにしておく方がよい。また、他の分類群も含めて全体で方針を統一しておいた方がよい。
- 最新の IUCN レッドリストでは、学名が変わっている種もある（例：ヤンバルクイナ）。国内では日本産鳥類目録改訂第 7 版を用いているが、国際的な推薦書で用いる学名は IUCN が用いているものに従っておいた方がよいのではないか。
- コウモリ類は、世界地図上に種数を等高線（グラデーション）で示した文献がある。東南アジアと南米で種類が多いが、琉球列島もぎりぎりその端くらいにかかっていた

と思う。文献を確認して提供する。

- 哺乳類では特にないが、奄美・琉球は、黒潮による海流分散によって分布が複雑化している事例がみられることも特徴かと思う（例：黒潮のよって南方の要素が台湾から八重山を飛び越えて沖縄島や奄美大島に分布。逆に、黒潮反流で北方の要素が屋久島や奄美大島から沖縄島を飛び越えて八重山や台湾に分布など)。生物の分布に黒潮が大きな役割を果たしているという点で、植物や昆虫では海流分散で特異な分布をしているものが結構あるのではないか。
- 比較解析の面積－種数の関係や、種数と固有種率、亜種を含んだ場合の固有種率などを数字で示すと、島が分かれていることを反映しているから当然なのではという、若干の不安も感じる。島間で種や亜種に分化していることを地図で見せると納得し易いのではないか。
- 「モニタリング」の項目では、遺産価値を表す自然環境や生物のモニタリング（例：やんばる地域や奄美大島でマングース駆除事業のルートセンサスで、カエル等の小動物の生息状況も把握されている）だけでなく、遺産価値に対する負の要因（例：観光利用状況、ノイヌ、ノネコ等）のモニタリングと指標も必要ではないか。

３．その他

- 野生生物と社会学会（旧野生生物保護学会）大会が今年の 11 月 22～23 日に沖縄で開催される。伊澤教授は事務局長。世界遺産と関連して何かシンポジウムや集会などを企画するようなことはないか。